

いととポのうた

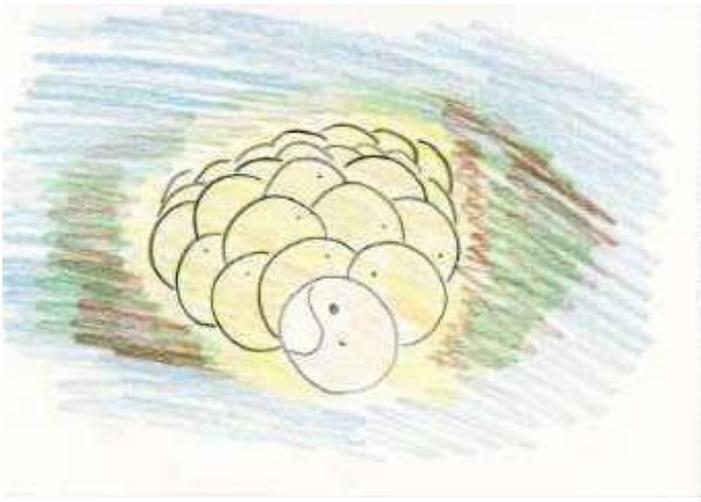




いとトンボのうた・くぼみつひろ



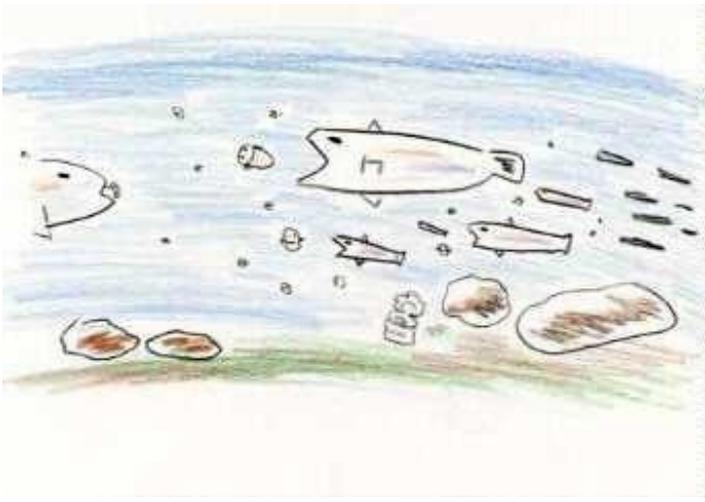
ある小川の川底に、小さく輝くものがあります。
それは、いとトンボの赤ちゃんです。



小さなカラの中で新しい世界を夢に見ながら、みんな、
いつか外に出られる日をじっと、待っています。



その日が来たと知った子供たちは、うれしくて飛び出していきました。
ところが、その先に待っていたのは、たくさんの魚たちでした。



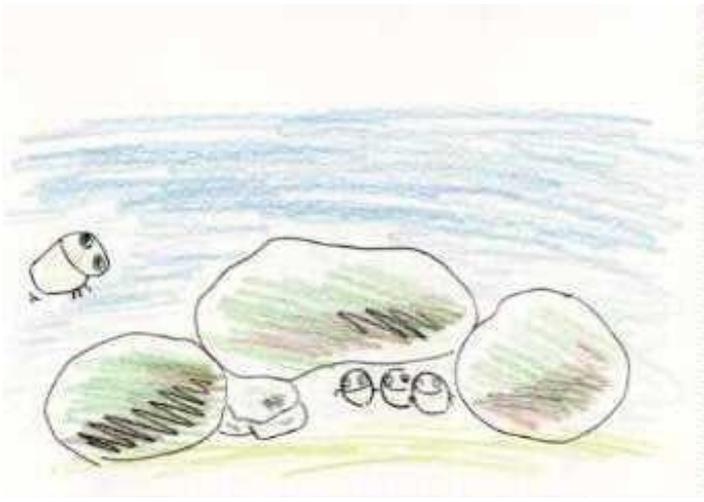
大きな魚たちにおそわれ、みんな必死になって、ちらばって逃げました。
でも多くの子供たちが、魚たちに食べられてしまったのです。



すっかり魚たちがいなくなって、「もう大丈夫だよ」と言って川底からイトミミズが顔を出すと、それを聞いた子供が、空き缶から顔を出しました。



よかったーと思った瞬間、イトミミズの体がタガメの腕に捕らわれていました。
”早く逃げろ”いとトンボの子供は、必死になって逃げました。



「どうしよう・・・」一人で心細げにさまよっていると、どこからか
「こっちにおいでよ～」と声が聞こえます。仲間達が岩の下に隠れていたのです。

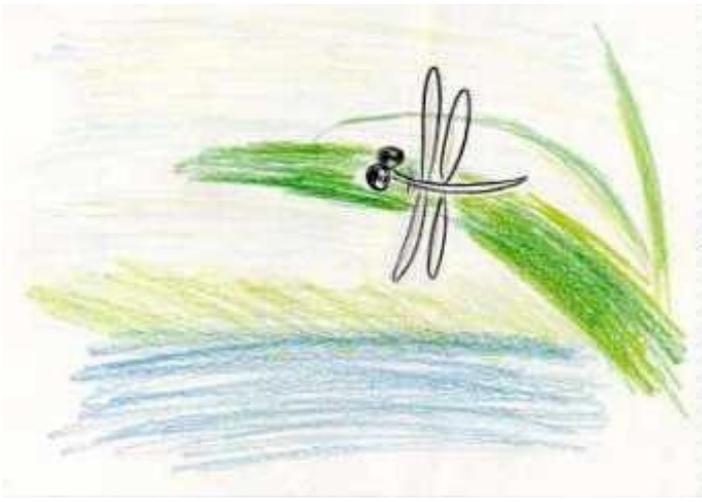


ところが、その声を岩陰にいたカニが聞きつけみんなに襲いかかりました。

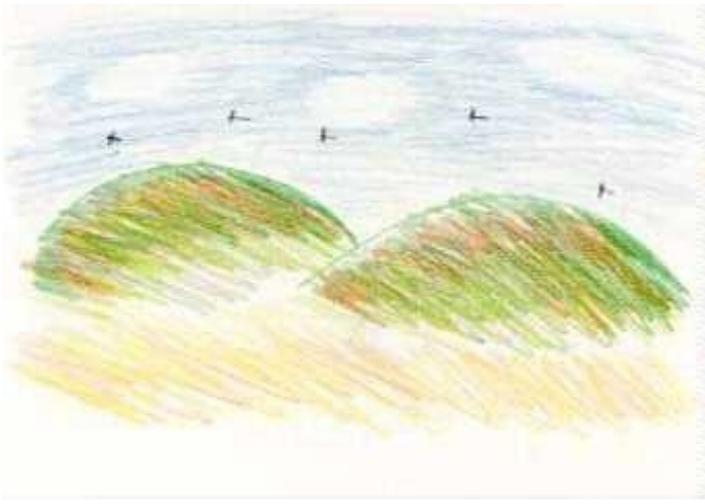
「せっかく会えた仲間なのに！」その子は一人泣きながら逃げます。



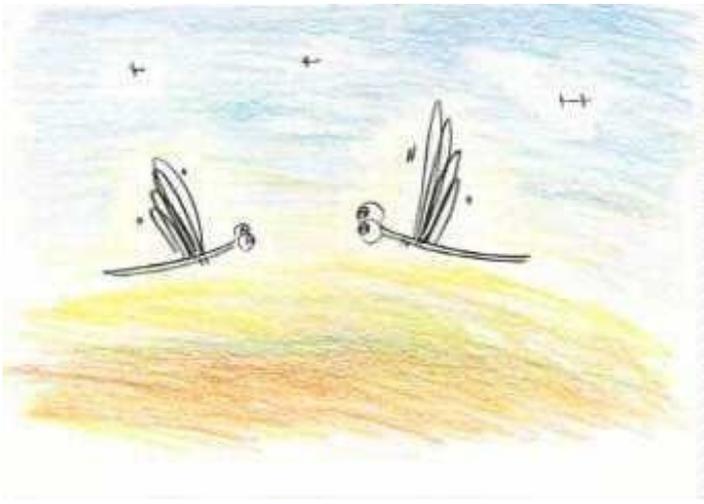
一人で逃げさまよいながらも、月日は流れ、ある静かな夜のこと、水草の上に、寂しげな目でじっと月を見つめる、あの子供の姿がありました。



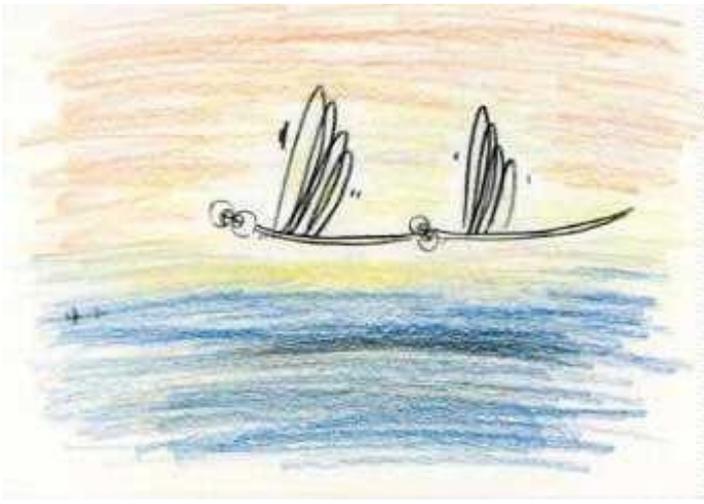
やがて東の空が白ばみ始めた頃、背中の羽を少しづつひろげ、辺りがすっかり明るくなる頃には、りっぱな大人のいとトンボになっていました。



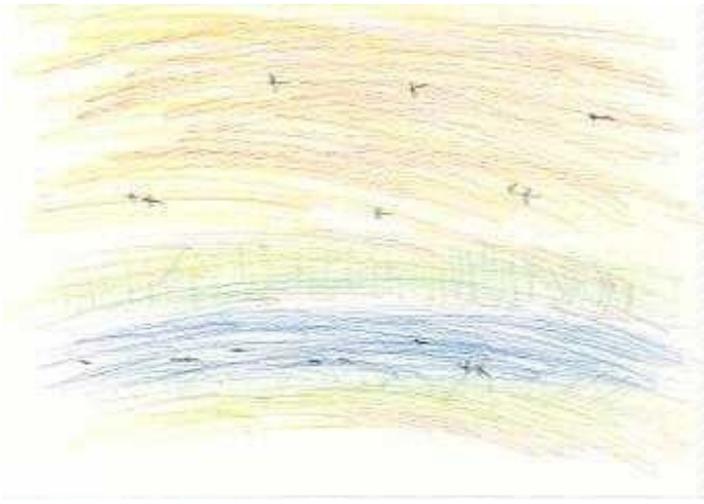
風に身をまかせ、大空を飛びいとトンボ。見たこともない世界に感動で胸がいっぱいになり、更に高く飛ぶ内に、他にも仲間がいる事に気づきます。



嬉しくて仲間達と一緒に飛びました。時間を忘れて飛び続け、
日が少し傾きかけた頃、一匹のいとトンボと出会います。



言葉もなく二人は寄り添って飛びます。水の上、木の上、土の上、
子供達の為に、いろんな色を集めながら・・・。
やがて、命の終わりを感じた二人は最後の目的、
水面にタマゴを産みに行くのです。



最後の力をふりしぼり、産み付けを終えたいとトンボたちは、
力つきて次々と水に流されていく。わが身を茜色に染め、
会うこともない子供達に、命のぬくもりを残して. . .。



秋の夕暮れ散歩道、小さな小川の物語。

そして．．．小さな命がまた一つ、輝きはじめた。